

## 1. はじめに

子どもは魅力的な音や音楽に出会うと「楽しそうな曲だから歌ってみたい」「好きな感じだからもつと聴いてみたい」などの思いをもつ。その中で、自分の目指す表現が生まれ、音と向き合いながらくり返し試したり、友達と対話しながらよりよい音楽表現になるように吟味したりするなど、試行錯誤していく。これは、前研究主題『夢中になる』でも確かめられたことである。そして、新研究主題「その子らしく学ぶ」においても変わらずに大切にしていきたいことである。生活経験や感性といったその子からにじみ出てくるものに焦点を当てていく「その子らしく学ぶ」では、その子をよりとらえることができると考えている。そうすることで、『夢中になる』では見えてこなかった子どもの姿が見えてくるだろう。研究1年次では、「その子らしく学ぶ姿」を「自分の目指す表現に向かって試行錯誤する姿」「その中で、自分の目指す表現を更新していく姿」と置き、「その子らしく学ぶ」よさや可能性を考えていきたい。

## 2. 研究の目的と方法

音楽科部が考える「その子らしく学ぶ姿」が見られるのか、また「その子らしく学ぶ」にどのようなよさや可能性があるのかについて、2つの実践を基に考えていくことを目的とした。なお、分析するにあたり、抽出児を置き、動画記録の中で見られた発言や行動、実際の演奏や授業で使用したワークシート、振り返りなどを分析対象とし、子どもの思いやその背景にあるもの、試行錯誤のプロセスなどを検証していく。

## 3. 研究の内容

### (1) 1年「山の音楽家の仲間になろう」（音楽づくり）

#### ①題材の概要について

本題材では、『山の音楽家（水田詩仙：訳詞、ドイツ民謡）』の中に登場する動物のように、自分が選んだ動物のイメージに合った楽器を使って演奏する活動を行った。自分の目指す表現に近づくように、自分なりの理由を考え試行錯誤していくことを通して、表現したいことが明確になっていく実感や「自分にもできる」「こうやったら表現できそう」という思いをもつことを願い、本題材を設定した。

『山の音楽家』を聴いた子どもは、曲中に登場する動物と楽器とを音色や見た目を視点として結びつけて考え、その関係性に気付いていった。その中で、曲中に出てくる動物だけでなく、自分がなりたい動物になって演奏したいという思いをもった。そして、動物に対するイメージを詳しく書いていくことで、そのイメージが楽器を選ぶ際の拠り所となっていった。

動物が決まったところで、音楽室の楽器と出合った。様々な楽器にふれ、音色を確認したり、鳴らし方を考えたりした。中には、自分のなりたい動物を思い浮かべて、楽器を探す子どももいた。その楽器の音色と動物の鳴き声・動き方・見た目などの特徴とを結びつけて考え、楽器を探していった。同じ楽器からも鳴らし方によって異なる音色が出ることに気付くと、いかに動物に合う音色を出そうかと考え始める姿が見られた。

題材の終盤には、自分の選んだ動物と楽器を『山の音楽家』の旋律にのせて歌う発表会を行った。演奏を聴いた子どもは「ハムスターが走っていて、カラカラって鳴っている音みたい」「ウグイスの鳴き声とトライアングルの音が似ている」と動物の様子と楽器の音色とを結びつけて感想を言った。その後、演奏者から理由を聴くと「同じハムスターを選んだけど、トライアングルの音だと食べている感じはしない（音色）」「トライアングルを速く叩くと走っている感じがするんだ（音色）」「体が大きいから、音を大きくしたんだね（強弱）」と自分の考えを表出させる姿が見られた。動物と楽器の音色との結びつきだけでなく、その他の音楽を形づくっている要素とも結びつけながら、学びを深めてい

くことができたのではないだろうか。発表が進んでいくと、演奏者がなぜその楽器を選んだのかを予想しながら聴く子どもが増えた。そして、その理由を聞いて予想が当たっていると、演奏者は聴き手に伝わった感覚を受け、嬉しそうにする様子が見られた。目指す表現の実現に向けて自分なりに考えて向かっていくことができたことが自信につながり、達成感を得ることとなったのだろう。

## ②抽出児 A 子の「その子らしく学ぶ」姿

### ア. 題材を通して、音色という音楽を形づくっている要素を手がかりにして考える姿

第①時に『山の音楽家』を聴いた際、A 子は手拍子をしながら聴いていたが、すぐに手拍子をやめた。曲の感想を発言する A 子は「たぬきはおなかをポンポンしてて、ポコンポコンってやるじゃん？だからたいこ。ことりはピュッピュッってやるからフルート。」とその動物の姿や鳴き声から音色を連想し、楽器の音色と結びつけて考えていたのだろう。曲中に出てくるフルートの音色を確認する際にも、「喋らないで、こうやって（手拍子）やらないで」と周りに訴えかける姿が見られた。A 子には曲を聴きたいという思いがあることが感じられた。直前の発言では「（ことりは）ピーピーやっててそれも笛みたいな音がする」と言っていることから、フルートの音色とこたりの鳴き声が似ていることを知っている様子であることが分かるが、改めて確認したいという思いがあり、このような声かけをしたのだろう。

第③時、初めて楽器と出合った際には、「ピピ」と言いながら楽器を見て回る姿が見られた。A 子の選んだ動物（ウグイス）の鳴き声の音色を探そうとしていたのだろう。そして、ウグイスに合う楽器の音色は「高い音」であり、金属系の楽器なら思い通りの音が出ると考え、楽器と関わっていった。そんな A 子が初めて触れた楽器はツリーチャイムであった。しかし「なんか違うな」とすぐにほかの楽器に目を向けた。ツリーチャイムでは様々な高さの音が出るため、A 子の思い描く「ピピ」という音とは合わなかったのだろう。その後、ほかの楽器を手に取り、音の出し方を考えながら様々な楽器と関わる姿が見られた。その中で、A 子が「ピピ」と言いながら音を確認していたのが最終的に選んだトライアングルであった。様々な楽器にふれて音を聴き比べていた A 子は、すずを持った際にも「ピピ」と言いながら音を出していた。しかし「ピーピーという笛みたいな音（音が出る楽器）がない」「ほとんど全部やった」と、自分が思っている「ピピ」に合う音が見つからない様子であった。教師が「どれがピーピーと似てそう？」と問うと、「なんかあったんだよ、どれだったかな」と探し始めた。そしてすずを置き、周りにある楽器を鳴らしていくと、似ていると感じていたトライアングルを見つけることができた。「こっちの方が高いんだよね」と異なる辺を叩きながら、トライアングルの音色の違いにも気付いている様子が見られた。

第④時には、C 子に「こぐまのどういう音を出そうとしているの？」と音色を視点に声をかけた。しかし C 子は「音っていうか、手みたいな形をしているから……」と音色ではなく、形で動物と楽器とを結びつけていた。思っていた返事が来なかったのか、C 子の耳元で「これがウグイスの音だよ」と、自分が選んだ音を聴かせてその場を後にした。第⑤時にも C 子に関わっており、その際には「すずをどうやってやろうと思っているの」と問いかけ、すずの演奏方法を C 子に教えている姿が見られた。すずを両手に持ち、くまの手の形にして鳴らそうと考えていた C 子に「すずはこうやって鳴らすんだよ」と手首を叩く演奏方法を示していた。くまの姿からではなく、音色に着目して考えてほしかったのかもしれない。

第⑥時の発表会でも、友達の発表を聴くと音色に着目した感想を多くもった。「ピピピピピって鳴っているみたいな音」「ガリガリって木の実を食べているみたい」と動物の様子と楽器の音色とを結びつけて考えていることが分かる発言が多かった。中でも、2人同時にカバサを演奏し、ハムスターがえさを食べているところを表現した友達に対して、一人ずつでは食べているようには感じないこと、2人一緒だから食べている感じがするのだという音の重なりを感じていた。

このように、A 子は題材の最初から最後まで、音色という音楽を形づくっている要素を手がかりにして、自分の楽器を選んだり、友達と関わったりしていた。

## イ. 自分の生活経験と音とを結びつけて考える姿

題材の至る場面で、生活経験を基に考えていると感じられる発言が多く見られた。

第①時に『山の音楽家』を聴いた際、D男が「フルートってなに？」と言うと、A子がすかさず「フルートって笛だよ」と教える姿が見られた。今までにフルートを見たことがあり、その音色を聴いたことがあるのだろう。動物を決める際、初めは人間を選んでいたA子であったが、周りの友達が動物を選び、変身することを楽しむ姿を見せると、「変身できない、人間だもん」とつぶやいた。A子は家庭で猫を飼っているため、一番身近な動物である猫について考え始めたが「分かんない、ねこって言っても、楽器ないじゃん」と困る一面を見せた。猫の鳴き声（ニャー）を音で表現することはできないと思っていたのだろう。音色を思い浮かべることはできずにいたA子であったが、自分も変身したいという思いが強くなり、動物をウグイスに決めた。その理由は「お姉ちゃんがバードウォッチングをしていて、ピーピーって鳴いていた、だから笛だと思った」と、自分の生活経験を基に動物を決め、さらにピーピーという音色とも結びつけていた。A子は、動物のイメージを音色で表せるかどうか考え、決定したのである。動物が決まってからのA子は、「ピッピー」「ピヨピヨ」「ピピー」と様々な鳴き真似をしながら、ウグイスの特徴をワークシートに書き続けた。「めざましみたい、みかんが好き」と書き、教師から「めざましってことはうるさいってこと？」と聞かれると、「うん」とうなずいた。そして、ウグイスについて楽しそうに教師に語る姿も見られ、そのイメージを膨らめていった。

第⑥時の発表会では、インペリアルマンモスを大太鼓の大きな音で表現した友達の演奏を聴いて「ドンドンって近づいている感じがした」「インペリアルマンモスの模型を見たことがあるんだけど、音楽室くらい大きいんだよ」と、聴いた感想だけでなく、自分が知っているその動物の大きさも加えて話した。また「木の実をガリガリしているみたい（りす）」「カラカラって回るところを走っているみたい（ハムスター）」と、具体的な様子を想像して発言している様子から、A子が生活経験を基に、知っていることを表出していることが分かる。そして、その生活経験があるからこそ、A子は動物のイメージと楽器の音とを結びつけて考えることができたのだろう。

今後、A子が自分の生活経験の中にある音と題材とを結びつけて考え、目指す表現に向かって試行錯誤したり、考えたことを言語化したりする経験をくり返し行っていくことで、A子の音楽表現や感性がより豊かになるのではないかと考えている。

## (2) 6年「曲の総合的なアレンジに挑戦～GarageBandを用いて～」(音楽づくり)

### ①題材の概要について

本学級の子どもは、昨年度、iPadの標準アプリであるGarageBandを使用し、アニメのイントロをアレンジした。一音一音の音色にこだわって様々な音を部分的に挿入したり、多くのトラックを扱って音を重ねたりして、個々の目指す表現に向かって試行錯誤する姿が見られた。また、今年度行った合奏の授業では、録音した演奏をスコア譜を見ながら聴き、音楽の縦と横との関係を意識した総合的なアレンジをしている姿が多く見られた。しかし、合奏では、他者と目指す表現を一致させたり、他者の演奏に委ねなければならなかったりするため、自分の目指す表現を実現することには難しさもあった。

そこで、本題材では個々にGarageBandを使用し、アニメのメインテーマの総合的なアレンジを行うことにした。これまで、一音一音にこだわりをもってイントロアレンジをしたり、「よりよい合奏」を目指して仲間とともに総合的なアレンジをすることに面白さを感じたりしてきた子どもだからこそ、個々の目指す表現に向かってさらにこだわってアレンジをしていくと考えたからだ。メインテーマのメロディと伴奏、コード進行、ベース、ドラムの5つのトラックが既にあるデータを受け取った子どもは、目指す表現に向かって個々に試行錯誤し始めた。トラックごとにソロ・ミュート機能を使い、音色や音量、ペロシティ、アーティキュレーションなどを変更したり、トラックを複製してトランスポーズをし音楽に厚みをもたせたりした。小節を追加し、新たにイントロをつける子どもも多くいた。ある程度、個々でアレンジが進んだところで、お悩み相談会を行った。お悩み相談会で子ども

は、友達を目指す表現やアレンジにふれたり互いのアレンジについて一緒に考えたりすることを通して、新たなアレンジ方法や音の重ね方などを習得しながら個々の目指す表現を更新していった。このように、個々にこだわりをもってアレンジをしてきた子どもだからこそ、発表会ではたくさんの音が重なっているアレンジだとしても、音楽の縦と横との関係を聴き取りそれぞれのアレンジのよさや面白さ、美しさを感じ取ることができていた。

## ②抽出児E子の「その子らしく学ぶ」姿

### ア. 音にじっくりと向き合う姿

この姿は、本題材でE子が「その子らしく学ぶ」根幹にあるものの一つであり、題材を通して見てとることができた。第①時で同じメインテーマの4つのアレンジを聴き比べる際には、微動だにせずじっくり聴く姿があった。何度か聴き直した後、F子と一緒に考え始めた。E子もF子も、自分が感じたことや気付いたことを互いに言い合うが、相手の意見に簡単に流されることはなく、「ちょっと待って、もう一度聴いてみる」とさらに思考を重ね、じっくり聴いて話し合う姿がたくさん見られた。お互いの意見を確かめる際にも、周りの音を遮断するかのように何度も耳に手を当てて、「音」をじっくり聴く姿が見られた。F子が「なんかリンリン鳴ってない？」とつぶやくと、E子はもう一度じっくり聴いてから、息をのんで「鈴！！」と答える場面があった。音を聴いて何かに気付いた時の「息をのむ」仕草もE子らしい姿であると感じた。答え合わせの時間になっても何度も音を聴き直し、根拠を探している様子があった。全体で答え合わせをする際に他者が理由を言うと、発言者の方を向いて「そうそう！（その音）聴こえた！」と頷いたり、F子と目を合わせたりする姿があった。正解が分かるごとにF子と喜び合ったり、授業の終わりに「足が震えた」という発言をしたりしていることから、音に真剣に向き合っていたことが窺えた。

第②時からアレンジを始めると、あれだけF子と会話をしていたE子が、一言も話すことなく自分の音と向き合っていた。第③④時のアレンジ中は、他者には見向きもせず、全く話さずに授業を終えた。それだけ、自分の音にじっくり向き合っていたのだろう。第⑤時では、「お悩み相談会」として意図的に他者と関わる場面を設定したため、他のアレンジに興味を示したりアレンジの幅を広げようと自ら友達に関わったりする場面も見られたが、第⑥時以降は、やはり自分のアレンジに没頭しているE子の姿があった。本当にわずかな音の違いにこだわり、音色や音量、音の重ね方を変えていき最後まで音とじっくりと向き合う姿が見られた。

### イ. 自分の生活経験と音とを結びつけて考える姿

第③時から、授業の最初に教師が技紹介を行った。小節の挿入の仕方やスケール機能の使い方、ペロシティやトランスポーズの使い方とその効果など、毎回の説明をうなずいて肯定的に聞いていた。「(イントロをつけ足して、イントロとその後の音源に)間があるとテンションが上がる感じがする」「(トランスポーズをすると)なんだろう、音が広がった感じがする」などと発言しており、今までの生活経験と音とを結びつけて考え、それらの技による効果を実感していたことが窺えた。

また、第⑤時で「お悩み相談会」を行った際に、その時点ではE子と同じグロッケンを旋律に使っていたG男のアレンジを聴き「なんかキンキンするね」と発言した。その時には「キンキンする」理由が定かではなく、「なんか」と曖昧な表現の仕方をしていたが、G男のアレンジを詳しく見ていくと、グロッケンのトラックは複製してあり、さらに2オクターブのトランスポーズをしていることに気付いた。その時、E子は「だからキンキンしたのか」とつぶやく、「少しいじっていい？」とG男に確認した後、ソロ・ミュート機能を使いながらトランスポーズによる効果を確認する姿が見られた。自分が聴いた感覚と、実際にアレンジとして行われていることとをつなぎ合わせ、「キンキン聴こえる理由」を明確にしていった。トランスポーズによる効果を実感したE子は、今後の普段の生活の中で聴こえる音や音楽に対して、その見方を発揮していくことだろう。

## ウ. 感性が豊かで、瞬時に合うか合わないかを判断する姿

第②時にアレンジを開始すると、音源は停止したまま、すぐに打楽器のページを開き、音色を探していった。ドラムの種類を変えながら、一音ずつどんどん鳴らしていた。次にシンセサイザーを開き、その音色を次々に変えながら F3 と C4 の 5 度の和音を鳴らしていた。この時も音源は停止したままだった。おそらく E 子は、この時には漠然としたイメージがあり、それに合う打楽器やシンセサイザーの音を探していたのだろう。また音感があるため、フレーズの最初は必ず Fm で始まることに気付き F3 と C4 の 5 度の和音を鳴らしていたと考えられる。しばらくすると、音色探しの手が一瞬止まり、Minimalist のカウベルを何度か叩く仕草を見せた。イメージに近い音だったのかもしれない。結局この時間では録音はしなかった。

第③時、トランスポーズの説明時に教師が旋律を 2 オクターブ下げると「怖い時に使いそう」と発言するが、メロディを 2 オクターブ下げたものと伴奏とを重ねて、メロディと伴奏が近い音域で鳴っているのを聴くと、「なんか微妙……」とすぐにその違和感に気付いていた。アレンジを開始すると、すぐにイントロ部分に 8 小節追加し、グロッケン音色を使い 2 分音符を和音で響かせていた。イメージに合ったのか、すぐに録音をした。次に、その録音したイントロに合う打楽器を探し始めた。ときには、打楽器を同時に鳴らして、音を重ねてじっくり音を探していた。前時もそうであったが、E 子は打楽器で音を探す際には、音を次々と鳴らしていく。時々、動きが一瞬止まる。その時は、E 子のイメージに引っかかるような気になる音なのだろう。その後は、ベース、ギター、弦楽器、シンセサイザーを次々に鳴らしていった。基本的に違う楽器にどんどん変えていったが「70s Synth Arp」の音で動きが止まり、旋律を弾く様子が見られた。すぐにその音で、旋律を最初から最後までコピー・ペーストした。E 子はイントロの部分を考えていたにもかかわらず、気になる音色を見つけると、それを「旋律」で使うという判断をしたのだろう。

E 子は、その後も常に感性を働かせながら iPad をすばやく操作していった。GarageBand の操作に慣れていることもあるが、目指す表現に近づけるため、イメージに合うか合わないかを瞬時に判断している E 子の姿が印象的であった。

## エ. 題材を通して音楽の縦と横との関係という音楽を形づくっている要素を手がかりに思考する姿

E 子は常にソロ・ミュート機能を使い、音楽の縦と横との関係を意識した総合的なアレンジをしていた。それは、そのよさを E 子自身が感じていたからだろう。何か音を追加したら、必ずソロで聴き、その後他の楽器との組み合わせを聴いていた。また、その都度、細かく音量のバランスを気にして調整する姿があった。第③時では上述の通り、「70s Synth Arp」の音で旋律をコピーしたのだが、その際にも元々入力してあったグロッケンの音量が大きすぎると感じたのか、すばやくグロッケンの音量を下げ、再びコピーしたばかりの「70s Synth Arp」のトラックをソロ機能を使って聴いた。また、イントロにストリングスで音入れをしようとした際には、旋律を弾いてみたり、グリッサンドのような動きを試してみたりしていた。ストリングスの種類を決める時にもソロ機能を使って 3 種類からどれがいいかを選び、決めてからは必ず全体を鳴らして聴いていた。

第⑤時では、H 子のアレンジの旋律を目立たせるために複製するのもいいという話し合いになった時には、一度しか見ていないはずの G 男のアレンジを思い出し、「G 男のアレンジ、そうなってるよね？」と発言した。これは、G 男のアレンジを確認した際に、どの楽器をどういう役割で使っていて、どういう音量バランスになっているかを考えていたからであろう。さらに、G 男に「この音とこの音の組み合わせが合わない」と説明する際にも、実際にソロ・ミュート機能を使って重なり具合を G 男に聴かせて「ね？分かる？」と、説得力のある伝え方をした。音楽を俯瞰してみて、総合的なアレンジをしている姿は、まさに音楽の縦と横との関係を手がかりにして思考する姿と言えるだろう。

## オ. なんとかして相手に伝えようとする姿

アレンジをしている際には他者に関わる姿を見せなかった E 子であったが、それ以外の時には自分

の感覚や思っていることをなんとかして相手に伝えようとする姿があった。特に顕著だったのは、第①時のF子とのやりとりである。「最初のチャララランは、海っぽいんだよ、なんか」「チャーンっていうのが（波を手で表しながら）ゆったりした海っぽい」「チャーラ、チャーラ……って、歯切れ悪いところあるじゃん？」などと、擬音語を使ったり、旋律を手で表現しながら歌ったりするE子の姿があった。また、F子が「これ花嫁な感じがする」という発言をすると、E子は「分かる」と即座に反応し、「チャーン（上から下へ音程がスライドして下がる感じ）が結婚式の晴れ舞台みたいな感じするんだよ」と自らの言葉でF子の言葉を言い換えている姿も見られた。

第⑤時の話し合いの際にも、感覚や音を相手に伝える難しさを感じつつも、なんとかして伝えようとしている場面があった。I子に「E子のこの最初の音、何？」と聞かれたE子は「この最初の音でしょ？ちょっと水っぽい（……音をイメージした）」「キーボードの……（実際に操作して見せる）ってやるとこの音になる」と発言した。それを隣で聞いていたG男がその音色で適当に鍵盤を鳴らしていると、E子は水っぽくないと感じたのか「うまいことやると（水っぽさ）出てくるはず！」と発言した。E子自身は、どの音を鳴らせばいいのかは、感覚的につかんでいるが、それをうまく伝えられないようにも見えた。しかし、その後スケール機能を使うと判断したG男に「そう、それ！」と伝わった喜びを感じているようだった。

E子は、音楽に限らず「なんとかして相手に伝える」ことのよさを感じているのだろう。相手に伝わることで、共感できたり議論できたりして何かを見出したり創り上げたり楽しさを知っているのだろう。だからこそ、伝えることが難しい感覚的なこともなんとかして相手に伝えようとしていたのだと考える。

#### 4. 成果と課題

##### (1) 成果

##### ①とらえ同士を結びつけたり、その子の姿をプロセスで見えていったりすることによって、その子のとらえを更新することができる

6年生の実践におけるE子は、とらえたその子らしさを発揮して、音にじっくりと向き合い、感性豊かに音楽づくりをしていた。音楽科におけるその子らしく学ぶプロセスを追っていく中で、E子が友達の発言を自らの言葉で言い換えたり、伝える難しさを感じつつもなんとかして伝えようとした姿が見られた。この姿は「本来E子がもっているその子らしさ」である。日常生活におけるE子を見ていると、「相手に分かってほしい」「自分の考えを聞いてほしい」という思いをもっていることが分かる。相手に伝わることのよさや楽しさを感じてきているからこそ、このような姿が見られるのだろう。

このように、音楽の授業におけるその子らしく学ぶ姿を追っていった結果、本来その子がもっているその子らしさにも改めて目を向けることができた。音楽の知識が豊富で技能も高いE子だからこそ、教科の枠組み内でその子をとらえてしまいがちだが、その枠組みを外して日々の生活の中で感じているその子らしさも含めてその子をとらえると、教科の学びだけではない、その子の成長を支えられるようになるのではないかと考えている。

また、その子の姿を点とせず、プロセスで見えていくと、その子の考えの根拠になるものが見えてくる。第①時でわずかな音の違いにこだわり、最後まで音とじっくり向き合ったE子は、自分のアレンジをする際にも、音の重ね方や音量について考えていた。だからこそ、第⑤時の相談会の際にG男のアレンジを聴いて「この音とこの音の組み合わせが合わない」と説明できたのだろう。

このように、とらえ同士を結びつけたり、その子の姿をプロセスで見えていったりすることによって、その子のとらえを更新することができる。そのとらえが広がっていくことで、教科の学びやその子の人間性全般における成長を広く支えることができる。

##### ②その子らしく学んでいくと、教科の学びが深まっていく

その子のとらえが更新されると、教科の学びも深まっていくだろう。教師は以前から、A子が音色

という視点で音楽を聴き、自分の言葉で表出することができることをとらえていた。様々な音楽を聴いて、自分の思いや考えを表出できる A 子だからこそ、楽器を用いてもその一つ一つの音色に目を向けていくのではないかと考え、本題材を設定した。

A 子は多くの楽器を目の前にして「いろんな楽器を触りたい」という思いをもったが、活動に入ると「ピピ」という動物からイメージした音を探すため、様々な楽器を耳元に近づけて鳴らしていた。その結果、楽器の演奏方法や叩く場所によって音色が異なることに気付いた。そしてそれを自分の言葉で表出した。その A 子の言葉を聴き、周りにいた友達も「本当にそうかな」「自分もやってみよう」と試す姿も見られた。反対に、友達が楽器と関わる姿を見て、A 子が同じように試す姿も見られた。また、友達に関わる際にも音色について聞く A 子の姿も見られた。このように、A 子は題材を通して音色という視点で楽器や友達と関わっていった。このことは、A 子がかつともっていたであろう音色に対する見方や考え方が広がったり深まったりすることにつながったのではないかと考えている。このような姿から、A 子は自分の思いや考えを表出するだけでなく、「友達にも聞いてみたい」「自分もやってみたい」と他者から取り入れることもできると、教師のとらえを更新させた。

## (2) 課題（これから大事にしていきたいこと）

### ①その子をとらえ続けていくこと

この研究を行うにあたり、教科内や題材内でのその子の姿はもちろん、他教科や日々のその子についてを広くとらえることは必要不可欠である。そのとらえが根底にあるからこそ、よりその子に合った願いやかかわりを行うことができる。そうすることで、その子の教科の学びや本来その子もっているその子らしさに還っていくものとなり、その子にとってよりよいものになるのではないかと考えている。抽出児だけでなく、学級一人ひとりに対してもとらえ続けていくことを忘れずにしていきたい。

### ②多様な音楽を形づくっている要素にふれる機会を保障すること

低学年の段階から、音楽を形づくっている要素を基にして目指す表現に向かう経験を重ねていくと、魅力的な音や音楽と出合った際に、学びの幅が広がるのではないかと考えた。実際に 1 年生の実践において、音色にこだわって楽器や友達、教師に関わる A 子の姿が見られた。A 子は目指す表現に向かう際、音色を手がかりとして試行錯誤していった。このような音色への関わりを重ねていくと、他の音や音楽を聴いた際にも、音色の視点で考えることができるだろう。同様に他の要素も扱っていくことで、音色だけではないリズムや速度などの視点からも考えることができるだろう。そうすることで「いろんな楽器の音が聴こえて大きな音だった」という音色のみの感想ではなく「だんだん音が大きくなっていったから、盛り上がっている感じがした」と音色と強弱の結びつきから感じたことまでを表現できるようになるだろう。しかし、要素を知らないままでは、この音楽科の学びは成立しない。そのため、子どもが自由に使える引き出しを増やしていくことができるよう、一部の要素だけではなく、様々な要素を扱っていきたい。

### ③子どもが非認知を認知するよう、要素を可視化していく

子どもは音楽を聴いた際、「楽しい感じがする」「少し悲しい感じ」といった感想をもつ。しかし、その理由を聴くと「なんとなくそう思う」と不明確な発言をすることが多い。その「なんとなく」という非認知を「なんでそう思うのか」と問い返すことで、子どもが立ち止まって再度音や音楽と向き合い、自分の感覚を認知することができるのではないかと考える。その際「速くて、弾んでいる感じがするから楽しいと感じたんだね」「ゆっくりで、音が低い感じがするから悲しいんだね」と、教師が要素を意識して子どもにかかわることで、子どもの思いの中にある音楽を形づくっている要素が見えるようになる。低学年の段階からこのようなかかわりをくり返していくことが、子どもが要素を基にして考えることができ、認知することにつながっていくと考える。そうすることで、音楽での「その

子らしく学ぶ」をより支えられるだろう。

## 5. おわりに

今回の検証により、子どもが音楽を形づくっている要素を基にして試行錯誤したり、目指す表現を更新したりしてその子らしく学んでいることが分かった。そこには、その子だけではなく、「音や音楽という材」「友達」「教師のかかわり」が必ず存在していた。

このことから、音楽科部が考える「その子らしく学ぶ」を

「材そのもの」「他者のその子らしく学ぶ姿」「教師のかかわり」などのその子らしさを揺さぶる対象と関わる中で、その子自身が立ち止まり、再び対象と関わる、そのくり返しの営み
---

と置くこととする。その子らしさを揺さぶる対象と関わることで、子どもは自分の目指す表現に対して「本当にいいのかな」「もっと他にないかな」と考え直したり、「やっぱりこれがいい」とより目指す表現を確かなものにしたりするだろう。そして再び対象と関わることにより、さらによりよいものにしていこうとするだろう。このくり返しの営みこそが、その子の学びをつくる、「その子らしく学ぶ」姿であると考えている。